

{ 日植防シンポジウムから }

農産物の情勢と生産における課題

—国内農業の維持と生産振興に向けて—

全国農業協同組合連合会 耕種資材部 すみ住 だ田 あき明 こ子

はじめに

日本の農業において、生産者の減少と高齢化の加速による労働力不足が深刻な問題となっている。担い手への農地集約を進めるには、担い手の確保とともにこれまで以上の生産効率化、高度化が求められている。また、日本の農業総生産額は2020年で8.9兆円であるが、これはピーク時の11.7兆円と比較すると2.8兆円減少しており、特に米の減少が激しい。一方、小麦、大豆、トウモロコシは輸入依存度が高く、消費者需要をまかなえていない。

さらに、2022年の原油などの資源や、輸入作物の高騰から、食糧安保の議論が高まっており、日本における農業の維持と生産振興の必要性が高まっている。

農業の維持と生産振興にむけては、どのような作目をどのように生産するか、ニーズに応じて進める必要がある。そこで、本稿では作目別の情勢をまとめるとともに、消費者および実需者のニーズに応える生産をするために必要な生産現場の対応について検討する。なお、本稿は、2023年1月に開催された日本植物防疫協会シンポジウム「農業生産現場が直面する病害虫防除の課題を考える」での講演をまとめたものである。

I 米をめぐる情勢

主食用米の全国ベースの需要は人口減少などにもない一貫して減少傾向にあり、2022年度の全国の需要量は約700万トンとなっている。近年は、毎年8万トン程度の減少であったが、最近では10万トン/年の減少率となっており、需要量の減少に歯止めがかかっていない。また、米の販売価格も長期的に低下傾向に推移している。そこで、加工用米、新規需要米（飼料用米、WCS米、米粉用米、等）、麦、大豆等の戦略作物への作付け転換が進められている（表-1）。

主食用米の需要が減少するなか、各産地においては特

色のある新たな品種の開発が盛んであり、高価格帯中心の一般家庭用米が栽培される傾向にある。消費者にとっては多様な品種の米を楽しみ、米の美味しさを感じることができることから、需要の拡大につながることを期待される。

一方、国内の米の需要は家庭内消費から中食、外食の占める割合が増加傾向にあり、こうした需要に向けた生産振興が求められている。中食、外食向けの米には、価格、品質、量の面で安定的な供給が求められており、生産振興にあたっては多収穫品種の採用や省力、低コスト栽培、収量の安定した生産技術が必要である。

また、米の需要拡大に向けた施策の一つとして注目されているのが海外への輸出である。米および米加工品の輸出実績は増加傾向にあり、国際競争力を有する米の生産に向けても、多収米の導入や生産・流通コストの低減が求められる。輸出の際に欠かせないのが、輸出先国の規制への対応である。例えば、中国向けの米の輸出では指定精米工場（国内3箇所）における精米および登録くん蒸倉庫（国内5箇所）におけるくん蒸が義務付けられており、精米にカツオブシムシ類、土壌、玄米、粳、ぬか、雑草種子および植物残渣が混入していないことが条

表-1 主食用米および戦略作物等の作付状況 (ha)

	平成27年度	令和3年度
主食用米	140.6	130.0
加工用米	4.7	4.8
飼料用米	8.0	11.6
WCS用稲	3.8	4.4
米粉用米	0.4	0.8
新市場開拓用米	0.2	0.7
麦	9.9	10.2
大豆	8.7	8.5
その他	10.0	10.2
戦略作物合計	45.7	51.2



Agricultural Product Situations and Problem in Production.

By Akiko SUMIDA

(キーワード：生産振興、防除課題)